「日本語教育学臨地実習」日本語教育機関訪問成果報告書

大学院総合国際学研究科博士前期過程
言語応用専攻日本語教育学専修コース
5109011
グェン　イェン　ティ　ハィ
Nguyen Yen Thi Hai

＜訪問先の情報＞

１．訪問に関する一般情報

訪問地（国・都市）

中国・吉林省長春市

訪問校・訪問先

東北師範大学

訪問先を選んだ動機

東北師範大学の中にある中国赴日本国留学生予備学校は、長年間日本語教育を行っており、このような日本語教育機関で実習するチャンスがあればいろいろ勉強できると思うため。

訪問期間

2009 月 8 月 9 日～8 月 22 日

住居・宿泊先

大学内の学生寮

２．訪問機関に関する情報

訪問機関の名称

東北師範大学中国赴日本国留学生予備学校

規模（学生数など）

大学：9604 人
大学院：1947 人　　（２０１０年現在）

立地（周辺の様子）
長春市内にメインキャンパスがあり、そこから少し離れた場所に新キャンパスがある。新キャンパスの方は市内から少し離れているが、大学のすぐ側に駅があり、またバスも多く走っているので、交通は便利である。

学部構成
哲学部、経済学部、法学部、教育学部、文学部、歴史学、理学部、工学部、農学部、管理学部、

研修校・研修先の特徴、その国における位置づけ
中国教育省の直接の管理下にある、教師の育成を行っている総合大学であり、21 世紀における中国政府の教育計画において優先的に援助を受けることのできる 100 の主要大学の一校にも選ばれている。

日本語教育開始年月日
中国赴日本国留学生予備学校は 1979 年に設立された。2009 年で 30 周年となり、記念式典が行われた。

３．宿泊先について

住居の形態
学生寮
一人部屋でそれぞれシャワー、トイレ付き。
250 元／1 日

学校までの行き方
学生寮は大学内にあり、図書館や講義等まで歩いて行ける。

周辺の環境
学内に食堂やスーパーがあるので、便利である。また大学の周りにはいろいろなレストランもある。バスやタクシーを使えば、簡単に市内へも出られるため便利である。

〈その他研究、実習の成果〉

１．施設見学に関して

１．１　内容

予備学校は広くてきれいなところに位置している。学校の設備も充実している。学習のための

施設、設備だけでなく、娯楽の施設も整っている。コンピューター室や LL 室もあるので、学習者はいろいろな形で学習質を高めることができると思う。

１．２　学んだこと

立派な学校で実習することができて、非常に役立つと思う。日本語教育に経験が富んだ先生方に交流したり、いろいろ学んだりすることができた。また、実際に学校の施設、設備、機材などを見学できた。

２．教壇実習に関して

２．１　内容

２週間の実習期間中に、初級４コマ、中級３コマの計７コマを担当した。以下は初級の授業内容である。

＊8 月 18 日（火）3 時間目

【授業の目的】動詞の過去形を把握し、簡単な質問をしたり答えたりすることができるようになる。

【導入文型・表現】

動詞の過去形導入。

【目標対話】

Ａ：今朝何時に起きましたか？

Ｂ：７時に起きました。

【準備】動詞の絵カード、名詞の絵カード、「に」「へ」「を」などのカード

人物の絵カード

【授業手順】

①新しい言葉・復習

・絵カードを使って、言葉を読ませて復習させる。

例：T：おきます

S：おきます

T：いきます

S：いきます

T：12 時に寝ます。

Ｓ：12 時に寝ます。

・　前の授業の「に」「を」「へ」を復習させる。

例：Ｔ：(「朝ごはん」と「食べます」の」カードを見せる)

　　Ｓ：朝ごはんをたべます。

②過去形導入

・黒板に「いつも」と「時間」と書いて、動詞の絵カードを貼る。

・田中さんの一日の日程を質問する。教師はクラス全員に聞く。

例：Ｔ：田中さんはいつも何時におきますか。

　　Ｓ：田中さんはいつも７時におきます。

　　Ｔ：田中さんはいつも何時に学校へいきますか。

・教師は各自に田中さんの日程について聞く。

・　カレンダーを使って、「今日」「きのう」を導入する。

・　「朝ごはん」「昼ごはん」「夜ごはん」「ごはん」「朝」「昼」「夜」「夕べ」「今朝」を導入する。

・　過去形を導入する。

Ｔ：田中さんはいつも７時半に起きます。

　　田中さんはきのう７時に起きました。

・　黒板に動詞の変化の例を書く。

例：起きます　⇒　起きました

　　寝ます　　⇒　起きました

・　絵カードを使って、学生全員に動詞の「ます」を「ました」に変化させる。

・　各自に動詞の変化を練習させる。

・　学生全員に質問をして、過去形を使って、答えさせる。

例：

Ｔ：田中さんはきのう何時に起きましたか。

Ｓ：田中さんはきのう７時に起きました。

Ｔ：田中さんはきのう何時に学校へ行きましたか。

Ｓ：田中さんはきのう８時に学校へ行きました。

・　各自に質問をして過去形を使って答えさせる。

例：

Ｔ：田中さんはきのう何時に夜ごはんを食べましたか。

Ｓ１：田中さんはきのう 9 時に夜ごはんを食べました。

・　学生にペアで質問したり答えたりさせる。

例：

Ｓ1：田中さんはきのう何時に寝ましたか。

Ｓ2：田中さんはきのう 12 時に寝ました。

・　学生にペアでインフォメーションギャップを使って、練習させる。その前に教師がモデルとして一度やって見せる。

・　ワークシートを使って、教師が質問して、各自に答えさせる。

≪反省と感想≫

（1）　授業の時間配分がよかったと思う。

（2）　インフォメーションギャップを使って、学生同士で練習させるのは効果的であった.

（3）　黒板に書く内容が少し多すぎたのではないかと感じた。

（4）　学生は発音を間違えてもあまり直さなかった。

（5）　教師の方も発音があまりよくないところがあった。

３．２　学んだこと

今回の実習で初級のクラスと中級のクラスで教えるチャンスがあった。また、日本語演習、読解、聴解などの授業を行うことができてとてもよかったと思う。初級の授業を行う際には、いろいろ準備をしなければならなかった。視聴覚の道具を自分で作ったり、教案を作成したりしていい経験になった。授業の前に授業デザインを考えて、実際に授業を行ってみて、授業の反省会で授業をもう一度振り返て、毎回の授業で発展できたと思う。反省会で経験に富んだ楠本先生、キン先生の貴重なコメントをいただいて、非常に役立った。私は 8 年間日本語を教える経験があるが、はじめて直説法で日本語を教えて、その難しさを実感できた。直説法のメリットとデメリットが理解できるようになった。実際に日本語の授業を行って、反省会で先生と皆さんのコメントをいただいて、次回の授業で進歩できたこともあったし、進歩が見られないこともあった。私の考えでは一回授業を行って、反省会で先生と皆さんのコメントをいただき、また自分も反省して、もう一度同じ授業を行ったら、前回の授業のマイナス点を改善できると思う。

３．今後の「日本語教育学臨地実習」の派遣先・研修対象としての適切性について

３．１　臨地実習の派遣先として

今回の実習は東北師範大学の日本国留学生予備学校において行われた。本学校は長年間日本語教育を行い、多くの業績を得たので、臨地実習の派遣先として非常に適切であると思う。予備校の先生方は豊富な経験があり、反省会ではいろいろ意見を聞くことができていい勉強になった。

３．２　臨地研究の対象として

今回の実習では直説法で初級と中級の学生に日本語を教えた。全くゼロから中国人の学生に直説法で日本語を教えてその難しさを実感できた。2 週間ぐらい教えた結果、初級の学生はひらがなとかたかなを読んだり書いたりすることができ、また、簡単な日常の言葉を話すことができて、大きいな成果を達したと思う。中級の学生は日本の最新の情報の読解を読むことができて、とても有意義な学習になった。

３．３　先般的に訪問先として

予備校で実習している期間には学校の寮に住んで、毎日食堂で食事して学生の生活を体験することができたので、大きな意義を持つ実習であった。中国の日常の食べ物を味会うことができて、とても貴重なチャンスになったと思う。食堂の料理を毎日食べて、いやになったことがあったが、どちらか言えば、それでもいい体験になった。学校の構内は運動場もあり、毎日の夜、運動場の中を走ったので健康がよくなった。学校の周りに木がたくさんあり、空気が非常にいい所であり、訪問先としてとてもいい所であると思う。

３．４　本学学生の訪問先への貢献

本学の学生が訪問先に貢献できることとしては、中国人の学生と日本語母語話者の交流であると思う。特にはじめて日本語を勉強する初級クラスの学生にとってはとても貴重なチャンスになると思う。最初に日本語を習ったときは日本語母語話者から学んで、日本の文化などを紹介してもらうことができて何よりもいい機会であった。それをきっかけにして、これから日本語学習でもっと頑張るだろう。

３．５　今後の課題・提案

今回の実習では、初級クラスの学習内容と学習期間は適切ではないところがあるので次回は出発前に実習生は教科書、教案などにより工夫する必要があると思う。毎日の授業の後に、反省会が行われて、授業のいい店、悪い点を反省した。もし、授業を行う前に準備会が行われて、授業の案を発表してみんなで意見を聞いた後で、実際に授業を行い、授業の後の反省会でもう一度その授業を反省すれば、より効果があるのではないかと思う。

「日本語教育学臨地実習」日本語教育機関訪問成果報告書

大学院総合国際学研究科博士前期課程
言語応用専攻日本語教育学専修コース
5109015
大平　美樹

＜訪問先の情報＞

１．訪問に関する一般情報

訪問地（国・都市）

中国・吉林省長春市

訪問校・訪問先

東北師範大学中国赴日本国留学生予備学校

訪問先を選んだ動機

①大学院の教育実習の授業で、海外実習先が東北師範大学赴日本国留学生予備学校だったため。
②東北師範大学の中にある中国赴日本国留学生予備学校は、日本へ留学予定の中国人学生に日本語の教育を専門的に行っている準備学校であり、中国における日本語教育では歴史のある学校のため。

訪問期間

2009 月 8 月 9 日～8 月 22 日

住居・宿泊先

大学内の学生寮

２．訪問機関に関する情報

訪問機関の名称

東北師範大学中国赴日本国留学生予備学校

規模（学生数など）

大学：9604 人
大学院：1947 人　　（2010 年現在）
予備学校：約 400 名

立地（周辺の様子）

長春市内中心にメインキャンパスがあり、そこから少し離れた場所に新キャンパスがある。予備学校がある新キャンパスの方は市内から少し離れているが、大学のすぐ側に駅があり、またバスも多く走っているため、市内に出ることはできる。

研修校・研修先の特徴、その国における位置づけ

中国赴日本国留学生予備学校は中国国家教育部の直轄下にあり、中日文化教育交流協議によって、1979 年に東北師範大学に設立された。日本の学校教育法に記載された中国唯一の中日両国政府合弁の教育施設で、赴日留学生のそれぞれのニーズに応じて日本語集中教育を行う学校である。

日本語教育開始年月日

1979 年に設立。2009 年で 30 周年となり、記念式典が行われた。

日本語学習者数

現在 400 名ほどの学生が在籍しており、その中に博士課程に進学する学生、ポストドクターの学生が 110 名ほど、新疆研修生 30 名、三種類奨学金学生 30 名余り、普通研修生 200 名ほどが在学している。

主な開講科目について（科目名・学年・時間数等）

⑴日本語クラス

初級：22 週(中国人教師 16 時間、日本人教師 4 時間)

中級：19 週(中国人教師 16 時間、日本人教師 4 時間)

上級：19 週(中国人教師 16 時間、日本人教師 4 時間)

⑵博士課程進学者、ポストドクタークラス

予備期間：13 週(中国人教師 20 時間)

前期：20 週(日本人教師 20 時間、中国人教師 10 時間)

後期：4 週(日本人教師 35 時間）＋パソコン課 16 時間

日本語担当教員数

中国側の教師には教授及び兼職教授６名、助教授７名、講師１３名、技師４名がおり、その多くは学者と教育の専門家である。日本側の教師陣は毎年文部科学省に選ばれた実力のある日本語教育経験の豊かな専門家からなっており、東京外国語大学及び国際交流基金派遣教師を中心とした基礎日本語教師団と東京工業大学をはじめとする専門日本語教師団、毎年 16 名余りの専門家が予備学校の教育を協力している。

使用教材

⑴日本語クラス

初級：主に『平仮名入門』、『新概念日本語』（１・２巻)とその付属教材、『新概念交際日本語』

中級：主に『中級日本語』(上・下)

上級：主に『新明解日本語』

⑵博士課程進学者、ポストドクタークラス

主に『実力日本語』(上下）とその付属教材、『中級日本語』(共に東京外国語大学留学生日本語センター編著)と、東京工業大学、筑波大学の専門教員によって作成されたもの。

３．宿泊先について

住居の形態

大学院生用の学生寮

一人部屋でそれぞれシャワー、トイレ付き。3 人で一つの共用のテレビルームがある。

250 元／1 日

学校までの行き方

学生寮は大学内にあり、図書館や講義棟まで歩いて行ける。

周辺の環境

学内に食堂やスーパーがあるので便利である。また大学の周りにはいろいろなレストランもある。バスやタクシーを使えば、簡単に市内へも出られる。

〈その他研究、実習の成果〉

１．施設見学に関して

１．１　内容

予備学校は教育施設、設備の充実に努め、ＬＬ教室、視聴覚教室、録音室、多目的ホール、120 台余りのコンピュータが設置された計算機室や、日本の国公立、私立大学、大学院及び日本語学校に関する学校案内と図書を備えている情報図書室がある。それぞれの教室にはコンピュータが一台ずつ備え付けられており、パワーポイントなどを用いた授業を行うことが可能である。教室に冷房設備はなく、窓を開けていると騒音で先生の声が聞こえづらいときがあった。

１．２　学んだこと

日本への留学生を対象とした日本語教育のために一つの立派な校舎が設けられており、日本語教育に大変力を入れている様子が伺える。ただし、ソフト面でまだ追いついていないところがあるのは否めない。

２．教壇実習に関して

２．１　内容

２週間の実習期間中に、初級４コマ、中級３コマの計７コマを担当した。以下は初級の３コマ目の授業内容である。

８月１４日（金）３時間目　（担当：大平　美樹）

【授業の目的】①ものの名前を日本語や中国語で何と言うか聞くことができる。
②ひらがな「あ～ん」の復習
【導入文型・表現】①日本語/中国語で～です/何ですか？②さあ、ちょっと分かりません。
【目標対話】Ａ：これは何(なん)ですか？
Ｂ：それは“香菜(しゃんつあい)”です。中国(ちゅうごく)の野菜(やさい)です。
Ａ：日本語(にほんご)で何(なん)ですか？
Ｂ：さあ、ちょっと分(わ)かりません。
【準備】「あ～ん」のひらがなフラッシュカード、ひらがな単語カード、料理カード(カテゴリーとなる材料、料理の写真、名前付き)3 カ国分それぞれ 3 枚ずつ。○○語　、も、で、さあ、ちょっとわかりませんのカード

【授業手順】
０．黒板にテーブルと食べている人の絵を書いておく。

１．ひらがな「あ～ん」の復習・確認
(1)ランダムに出し、コーラスさせる。
(2)「ふ」と「ぶ」、「は」「ば」「ぱ」などのペアを見せて、清音と濁音ができているか一人一人チェックする。
(3)単語カードをいくつか出してコーラス。

２．新出単語提示とその前の授業(「これ」「それ」「あれ」)の復習
(1)カテゴリー(野菜、魚、果物、肉)となる単語から提示。まず読ませて、そのあとＴ→Ｓ、コーラス。その後、黒板の左端に縦に貼っていく。
(2)料理名を提示。まず読ませて、そのあとＴ→Ｓ、コーラス。その後、中華料理、日本料理、朝鮮料理、と国別に縦に貼っていく。
(3)「あれ」の復習。途中で、黒板に書いたテーブルにその絵カードを張り、その前の授業で導入した「あれ」を使って、「Ｓ１：あれは何ですか？」「Ｓ２：あれは○○(料理名)です。」を復習する。
(4)「これ」「それ」の復習。教師が絵カードをもち、「Ｔ：これは何ですか？」「Ｓ：それは○○(料理名)です。」、そしてその逆を行い、「これ」「それ」の復習も行う。

(５)(３)と(４)を混ぜながら、「これ」「それ」「あれ」の確認作業も兼ねて練習。

３．料理カテゴリー名を提示と「～も」の復習
中華料理、日本料理、朝鮮料理の順に提示。読んでもらってから、Ｔ→Ｓ、コーラス、一人一人発音チェックする。その後、カテゴリー分けされて貼ってある料理の上に、カテゴリー名として提示して貼る。その後「～も」を使った練習をする。「Ｔ：てんぷらは日本料理です。寿司は？」「Ｓ：寿司も日本料理です。」料理名、カテゴリー名を変えて練習。

５．「～は中国語/日本語で～です」の導入
(１)教師が中国語とでのカードを見せて、「これは中国語で shuijiaozi(水餃子)です」とモデルを提示。その後カードを黒板に貼り、構文を提示。モデル提示、コーラス、一人一人チェックする。
(２)「Ｔ：これは中国語で何ですか？」「Ｓ：それは中国語で○○(料理の中国語名)」と疑問文を導入。料理名を変えて練習する。

６．「さあ、ちょっとわかりません」の導入。
(１)教師が梨を見せて、「これは中国語で何ですか？」と聞く。「それは li(梨)」ですと学生が答える。
(２)次に学生にまた梨を見せて、「これは日本語で何ですか？」と聞く。学生が答えられないところで、「さあ、ちょっとわかりません」のカードを見せて読んでもらう。その後、教師がモデル提示、コーラス。
(３)「さあ、ちょっとわかりません。」の練習。まず教師が香菜の絵カードを見せて、学生に聞く。「Ｔ：これは中国語で何ですか？」「Ｓ：xiancai です。」その後、同じカードを見せながら「Ｔ：日本語で何ですか？」と聞き、学生に「Ｓ：さあ、ちょっとわかりません。」を言わせる練習をする。

≪反省と感想≫
　ひらがなの発音は全部学んだので、復習として清音・濁音のペア練習を取り入れることができた。今回新出単語の導入が多く大変だったが、復習を取り入れながらなんとか終わらせることができ、新出単語の提示の仕方、黒板の貼り方はよくできたと思う。しかし、反省点は多い。
(１) 時間配分がうまくいかなかった。発音の復習が多くなってしまい、また新出単語が多かったためにそこで時間がかかってしまい、文型の方の練習があまりできなかった。
(２)「～も」の復習のとき、「～じゃない」を入れた練習をするのができなかった。
(３)「これ/それ」の復習のとき、学習者に近づきすぎてしまった。前の席の人には見えずらい状況となってしまった。
(４)「鶏肉」の発音のところで、「とれにく」になっている学習者の発音訂正を十分にできなかった。

(5)「さあ、ちょっとわかりません」は「さあ」と「ちょっと…」を分け、身振りをつけて教えたほうがよかった。また、時間が足りず学習者が定着できずに終わってしまった。

３．今後の「日本語教育学臨地実習」の派遣先・研修対象としての適切性について

３．１　臨地実習の派遣先として

今回は夏休み期間中のため通常の授業はなく、教育実習用に学内外より学生を集め、2 週間クラス(初級と中上級の 2 クラス) を設けていただいた。その際、予備学校の校長先生をはじめ、先生方、事務の方には大変お世話になった。特に今回担当してくださった中国人の先生からは授業について細かいアドバイスをいただき、また授業だけではなく滞在中のサポートも手厚く、安心して実習に取り組むことができた。臨地実習の派遣先として適切といえるだろう。

３．２　臨地研究の対象として

今回の実習のために、初級では全く日本語を学んだことのない学習者を集めていただいたので、直接法で教える日本語教育の難しさを体験できた。これは将来教師を目指す者にとって、非常に貴重な機会であったように思う。それだけではなく、同時に中上級レベルである既習者にも教える機会もあった。二つのレベル 7 コマの授業という分量もよかったと思う。実習対象としては非常に恵まれた条件だったように思う。また現地の教員も学生達もとても友好的に接してくださったのもよかった。

３．３　先般的に訪問先として

訪問先として、日本からの渡航費、現地滞在費、安全面などを考えると、実習しやすい場所であると考えられる。中国の中でも比較的安全であるし、学内も非常に清潔であり、滞在しやすい環境である。ただし、食事面では油っぽい食事がどうしても増えてしまうので、各自で調整する必要があるだろう(しかし、残念ながら寮にはキッチンや冷蔵庫がないため、限界はある)。また、予備学校があるキャンパスは、市街地からバスで 30 分以上かかる郊外にあり、まわりには商業地域がないため、学内のスーパーマーケットでは手に入らないものについては外に出ないといけない。そう意味では不便さが気になるが、実習をさせてもらうには恵まれた環境であると思う。

３．４　本学学生の訪問先への貢献

本学の学生が貢献できることと言えば、やはり現地の日本語学習者と話すことで、生の日本語や日本の情報を与えられるということではないだろうか。最近はインターネットの普及もあって、さまざまな情報が簡単に手に入る時代となったが、やはり実際に会って交流する機会をもつことは、日本語学習者にとってもよい刺激となり、学習に対するモチベーションも上がるのではないかと考えられる。実際、今回の実習で、日本や日本語、日本文化に対するイメージが変わった(い

い意味で)という学習者もいた。

また、現地では直接法で教えられる機会はまだ少ないようである。その意味でも刺激になったようであった。

３．５　今後の課題・提案

今回、初級、中上級共に実習生が作ったテキストを使用したのだが、作成時に中上級のクラスのレベルがどのくらいなのか、現地からの情報がなかなか来なかったこともあって、テキストのレベルが実際の学習者のレベルよりも簡単なレベルになってしまったのが非常に残念であった。既習者対象のクラスを編成し、オリジナルの教材を作成する場合は、学習者のレベルがどのくらいなのか、先方からできるだけ早く知らせてもらわないと間に合わないだろう。また、実習の準備であるが、事前になって慌ただしくなってしまったため、数ヶ月前からの長期計画を立て、着実に進めていったほうがいいと思われる。というのも、授業時間だけでは到底準備を終わらすことはできず、空き時間や授業終了後の時間帯を使わないと準備が終わらないからである。実習生間でも連絡を緊密に取り、「お互い協力しないと実習は成功しない」ということを念頭に取り組んでいけばいいのではないかと思う。

「日本語教育学臨地実習」日本語教育機関訪問成果報告書

大学院総合国際学研究科博士前期過程
言語応用専攻日本語教育学専修コース
5109001
勝俣　賢

＜訪問先の情報＞

１．訪問に関する一般情報

訪問地（国・都市）

中国・長春

訪問校・訪問先

東北師範大学　中国赴日本国留学生予備学校

訪問先を選んだ動機

東北師範大学とは、早くから東京外国語大学留学生日本語教育センターとの教育を通じての交流が盛んであり、２年前に楠本先生の引率のもとで実習が行われ、成功に終わっているため、本年度の訪問先も、交流の深い東北師範大学が選ばれた。

訪問期間

2009 年　8 月 9 日～8 月 22 日

住居・宿泊先

大学構内の学生寮

２．訪問機関に関する情報

訪問機関の名称

東北師範大学中国赴日本国留学生予備学校

規模（学生数など）

大学：9604 人

大学院：1947 人　　（2010 年現在）

立地（周辺の様子）

大学構内にスーパーや食堂があり、手頃な値段で日用品の購入や食事が可能な環境にある。
また、メインストリートへタクシーで 20 分程度で行くことができるため、換金等の際も困らない。
校門のそばにバス停もあるなど交通の便もよく、生活において何ら不便のない環境といえる。

学部構成

哲学部、経済学部、法学部、教育学部、文学部、歴史学、理学部、工学部、農学部、管理学部　など。

学事暦（授業期間／休暇期間）

9 月より授業が始まるため、今回の実習期間は休暇期間に当たる。

研修校・研修先の特徴、その国における位置づけ

中国教育省の直接の管理下にある、教師の育成を行っている総合大学であり、中国政府が教育拠点として力を入れている「重点大学」の一校である。東京外国語大学留学生日本語教育センターとの繋がりの歴史も長く、過去にも実習が行われ、成功裏に終わった実績がある。

日本語教育開始年月日

中国赴日本国留学生予備学校は 1979 年に設立された。2009 年で 30 周年を迎えたため、実習期間中の 8 月 16 日に３０周年記念式典およびシンポジウムが行われ､我々も楠本先生の実績により参加することができた。

本実習における日本語学習者数

23 名

（今回実習を受け持ったクラスは、本実習のために特別に編成されたクラスであるため、学習者には他大学からの参加者も含まれる。）

一クラスの学生数

初級クラス：11 名

中上級クラス：12 名

主な開講科目について（科目名・学年・時間数等）

今回の実習においては、本実習のために特別に編成されたクラスで授業を行ったが、
通常のクラス編成は、以下のようなものである。

・進学博士コース

学習期間：10 ヶ月

日本語学習時間数：計 36 週間（日本人教官、中国人教官による授業）

１時間＝45 分

予備期：13 週間、週 20 時間

前期：16 週間、週 26 時間

後期：7 週間、週 12 時間

・修了博士コース

学習期間：6 ヶ月

日本語学習時間数：計 24 週間（日本人教官、中国人教官による授業）

１時間＝45 分

予備期：6 週間、週 26 時間

前期：11 週間、週 28 時間

後期：7 週間、週 16 時間

使用教材

『実力日本語』、『日本語中級』

（今回の実習では、我々実習メンバー自らで作成したテキストを初級用・中級用の２部作成し、それを使用した。）

クラスの様子

今回実習を担当したクラスは、今回の特別クラスの募集に自ら志願した学習者が集まっていることもあり、大変熱心に授業に参加する学習者ばかりで、楽しい雰囲気の中に真剣さが伝わるような雰囲気のもと、授業を進める事ができた。

臨地実習に行くのが望ましい時期

今回実習を行った８月等の休暇期間に実習を行えば、教壇実習を行う機会が多くいただけるため、よいと考えられる。

３．宿泊先について

住居の形態

今回は大学構内の学生寮を利用したが、一人部屋に服を干すスペース、ベッド、机があり、大変清潔で、共用スペースにはテレビ、ソファーもあり、設備の充実した環境であった。

利用料も、一泊 250 元と安価であった。

学校までの行き方

学生寮は大学構内にあったため、徒歩５分ほどで学校に行くことができた。

周辺の環境

大学正門前にはバス停があり、タクシーの通行量も多く、交通の便は良い。

また、大学構内にはスーパー、食堂があり、いずれも安価で利用ができるため、生活に不便を感じることもない。大学周辺にはさまざまなレストランもあるため、食事に飽きるようなこともなく、大変暮らしやすい環境であるといえる、

〈その他研究、実習の成果〉

１．施設見学に関して

１．１　内容

大学の教官の方に施設を案内していただくことができた。

大学構内はかなり広く、設備も充実していた。教室にはパソコンとスクリーンが設置されており、パワーポイントや写真データ、音声データを用いた授業が可能であった。

また、大学の職員室のパソコンでは、日本語によるタイピングが可能であったため、日本とのメール等のやり取りにも問題がなかった。

・　　２　学んだこと

日本語教育のために、「中国赴日本国留学生予備学校」という、大きな施設を設けていたことか

ら、東北師範大学の日本語教育に対する力の入れようが伺える。

また、今回施設を見学するにあたって、構内にいらっしゃった先生方に大変歓待された。

これは、東京外国語大学留学生日本語教育センターのこれまでの実習先に対する貢献と、これからの更なる交流に対する期待によるところが大きいと考えられる。

２．授業見学に関して

２．１　内容

今回の実習は、休暇期間中に行われたため、現地の授業を見学することはできなかったが、実習の初級クラス（まったく日本語を学習したことのない学習者を揃えたクラスであり、授業は全て直説法で行った。）の最初の授業を楠本先生が行い、我々実習生でなく、実習先の専任・非常勤の教師の方々も、共に見学するという機会があり、そこで楠本先生の直説法による授業を見学することができた。

２．２　学んだこと

直説法で行う授業においては、当然のことながら媒介語として学習者の母語を用いることができないため、授業におけるジェスチャーでの指示の明確さが大変重要であること、そして、授業における時間、つまり学習者が授業を通じて日本語を学習することのできる時間は限られているので、無駄な内容をできる限り少なくし、テンポ良く授業を進めることも大切であるということを、楠本先生の授業を見学して学ぶことができた。

３．教壇実習に関して

３．１　内容

8 月 15 日（土）　１時間目

【授業の目的】

ひらがなの復習・ディクテーション、前日の復習および拗音・長音・促音の導入。

【導入文型・表現】

拗音・長音・促音

【目標対話】

前日の「これ（それ、あれ）は～です。」や「これは～語で何ですか？」という言い回しの定着。

【準備】

・フラッシュカード（「からめる」や「わたゆき」などの、単語になっているもの）

・ディクテーションの解答用紙

・黒板に拗音（「きゃ」～「りょ」）、長音（「ああ」～「こう」）、促音（「さか／さっか」など）のひらがなを書き、拗音・促音の２文字目は１文字目の４分の１の大きさで左下に

書くことも図で示す。
・前日の授業で用いた絵カード（「長春の地図」、「チヂミ」など）および実物教材（お菓子、雑誌など）
・「すいか」の絵カード

【授業手順】
1．フラッシュカード
・フラッシュカードを読ませ、発音矯正を行う。

2．ディクテーション
・「ゆうわ」「われわれ」「からめる」「やわらかい」「にほん」「てんぷら」「まさる」の７つ。それぞれひらがなで書き取らせる。

3．前日の復習
（1）「これ（それ、あれ）は～です。」の復習。
・前日の授業で用いられていた、お菓子、雑誌、電子辞書などの実物教材を用いて、「これ（それ、あれ）は～です。」の復習をする。

T：（日本語の雑誌を指差して）これは中国語の雑誌ですか？
S：いいえ、それは中国語の雑誌じゃないです。日本の雑誌です。

（2）「これは～語で何ですか？」の復習
・前日用いられていた「チヂミ」などの絵カードに加え、未習の単語である「すいか」の絵カードを用いて、）「これは～語で何ですか？」の復習をする。

T：（「すいか」の絵カードを指差して）これは中国語で何ですか？
S：西瓜（xi gua）です。
T：（「すいか」を指差し）これは日本語で何ですか？
S：さあ、ちょっと分かりません。
T：これは日本語で「すいか」と言います。

4．拗音・長音・促音の導入
・黒板に書いた「きゃ」、「ああ」、「さっか」などの拗音・長音・促音を一つ一つ指差して読み、リピートさせ、発音矯正を行う。
・「さっか」、「おっと」などの促音は、促音のあるものとそうでないものの区別を明確にするため、

「さか、さっか」「おと、おっと」というように読む。発音がうまくできていない学習者には、「sakka」「otto」といった表記を黒板に書いてから、再びリピートさせる。

３．２　学んだこと

（１）落ち着いて、時間配分をキッチリとさせて授業を進めることができた。

（２）「すいか」というテキストにない単語を導入して会話練習をしたことで、学習者の興味を引くことができたように思う。

（３）拗音の「ひょ」の発音が学習者にとって難しかったようで、定着させられなかった。

（４）長音と促音は、発音を先に示してからでないと（少し間をおくと）、すぐに発音を忘れてしまうので、もっと重点的に練習させるべきだった。

４．今後の「日本語教育学臨地実習」の派遣先・研修対象としての適切性について

４．１　臨地実習の派遣先として

今回の派遣先は、中国において日本語教育が盛んに行われている都市の一つである長春の、その中でも重点大学という、中国政府が力を注いでいる大学であるのみならず、その大学の留学生予備学校という、創立当時より東京外国語大学留学生日本語教育センターによる貢献の歴史がある学校であり、今後もこの歴史を存続させ、良好の協力関係を維持・発展させていく意味でも、派遣先として大変相応しい学校であると考えられる。

４．２　臨地研究の対象として

上記のように、本大学とこの実習先とは関係が深く、今回を除いても本学からの実習生がこの実習先で実習を行い、成功させた実績があるため、実習先の信頼も厚く、歓待をしてもらい、現地のベテラン教師からの授業に関するアドバイスをいただくこともできるため、実習を大変有意義なものにすることができ、隣地研究としてもやはり相応しい派遣先であると考えられる。

４．３　全般的に訪問先として

上記のような理由から考えて、我々のみならず、本学留学生日本語教育センターの教師のかたがた、そして過去の実習を成功させている諸先輩方の実績もあり、大変本学に期待し、信頼をして下さっている学校であり、設備や環境も良く、手厚く歓迎して下さるため、実習先、研究先というだけでなく、訪問先としても大変すばらしい対象であるといえる。

４．４　本学学生の訪問先への貢献

今回の実習では、直説法で授業を行い、その中でテンポ良く授業をする工夫や、明確に伝わる指示のジェスチャーの工夫を行ったため、学習者にとって新鮮であったであろうし、それに留まらず、現地の中国人教師の方々にも「参考になった」と仰っていただけた。これらの点では、授

業における貢献ができたように思う。

また、授業のみならず、実際に現地の教師の方および学習者の方と交流をすることができたため、現地の教師、学習者の方々に刺激を与え、日本語教育、日本語学習に対するモチベーションを上げることができたと考えられる。

４．５　今後の課題・提案

今後の課題としては、実習における事前準備の進め方が挙げられる。

今回の実習では、事前の準備の進行がやや遅れたため、実習先に到着した後に準備の続きをせざるを得なかった。もう少し余裕を持って準備に望みたい。

また、準備の担当の割り振りがうまくいっていなかったように思う。

今回の実習では、集団で実習を行ったにも関わらず、準備の負担が一部の人間に集中していたため、もう少しバランスよく準備の割り振りをするべきであったと思われる。

今回の実習も成功に終わり、学習者の方々のモチベーションの向上、そして教師の方と互いに今後の参考になる学びあいができたため、是非とも本実習先での実習を定期的に続けていただきたい。

「日本語教育学臨地実習」日本語教育機関訪問成果報告書

大学院総合国際学研究科博士前期過程
言語応用専攻日本語教育学専修コース
5108001
左嵜遥香

＜訪問先の情報＞

１．訪問に関する一般情報

訪問地（国・都市）

中国・吉林省長春市

訪問校・訪問先

東北師範大学

訪問先を選んだ動機

東北師範大学の中にある中国赴日本国留学生予備学校は、日本へ留学しようとする中国人の学生に日本語の教育を専門的に行っている唯一の日本への留学のための準備学校であり、日本語教育に大変力を入れているため。

訪問期間

2009 月 8 月 9 日～8 月 22 日

住居・宿泊先

大学内の学生寮

２．訪問機関に関する情報

訪問機関の名称

東北師範大学中国赴日本国留学生予備学校

規模（学生数など）

大学：9604 人
大学院：1947 人　　（２０１０年現在）

立地（周辺の様子）

長春市内にメインキャンパスがあり、そこから少し離れた場所に新キャンパスがある。新キャン

パスの方は市内から少し離れているが、大学のすぐ側に駅があり、またバスも多く走っているので、交通は便利である。

学部構成

哲学部、経済学部、法学部、教育学部、文学部、歴史学、理学部、工学部、農学部、管理学部、

研修校・研修先の特徴、その国における位置づけ

中国教育省の直接の管理下にある、教師の育成を行っている総合大学であり、21 世紀における中国政府の教育計画において優先的に援助を受けることのできる 100 の主要大学の一校にも選ばれている。

日本語教育開始年月日

中国赴日本国留学生予備学校は 1979 年に設立された。2009 年で 30 周年となり、記念式典が行われた。

３．宿泊先について

住居の形態

学生寮

一人部屋でそれぞれシャワー、トイレ付き。

250 元／1 日

学校までの行き方

学生寮は大学内にあり、図書館や講義等まで歩いて行ける。

周辺の環境

学内に食堂やスーパーがあるので、便利である。また大学の周りにはいろいろなレストランもある。バスやタクシーを使えば、簡単に市内へも出られるため便利である。

〈その他研究、実習の成果〉

１．施設見学に関して

１．１　内容

予備学校の先生に予備学校内を案内していただいた。構内は広く、設備も充実している。それぞれの教室にはコンピューターが一台ずつ備え付けられており、パワーポイントなどを用いた授業を行うことが可能である。ただ、交通量の多い道に面しているため、騒音で授業に支障が出る

こともある。

１．２　学んだこと

日本への留学生を対象とした日本語教育のために一つの立派な校舎が設けられており、東北師範大学が日本語教育に大変力を入れている様子が伺える。先生方の日本語能力も大変高く、また東京外国語大学の留学生日本語センターからも講師が派遣されている。

２．教壇実習に関して

２．１　内容

２週間の実習期間中に、初級４コマ、中級３コマの計７コマを担当した。以下は初級の４コマ目の授業内容である。

８月１８日（火）

【授業の内容】
時間の復習と動詞の導入。日常の行動について説明させる。
【準備】
時計、時間カード
動詞イラスト
助詞カード（は、に、です）

【授業手順】
１．復習
（１）教科書を閉じるように指示。
（２）（黒板に時計を貼って）
Ｔ：～さん、今何時ですか？
Ｓ：９時半です。
Ｔ：～さん、二時間目の授業は何時から何時までですか？
Ｔ：二時間目の授業は９時半から１０時２０分までです。
Ｓ：二時間目の授業は９時半から１０時２０分までです。
☆学生はほとんど問いかけに答えられず、リピートするのも困難であった。
（３）（時間カードを見せて）
Ｔ：～さん、今何時ですか？
Ｓ：１０時です。
（同じように何回か繰り返す。）
２．動詞導入
（１）（「起きます」イラスト提示）
Ｔ：７時です。（起きるジェスチャー）起きます。

Ｓ：起きます。

Ｔ：起きます。

Ｓ１：起きます。

（「寝ます」イラスト提示）

Ｔ：寝ます。

Ｓ：寝ます。

Ｔ：寝ます。

Ｓ２：寝ます。

（同様に、学生をランダムにあて、間にコーラスも交えつつ、一人ひとりに発音させ発音指導を行う。前に導入した動詞も随時混ぜて、イラストを見せて言わせる。）

３．文型導入

（１）「私」「七時」「起きます」それぞれイラストを黒板に貼る。

（２）その間に「は」「に」を貼る。

（３）Ｔ：私は七時に起きます。

Ｓ：私は七時に起きます。

Ｔ：～さん。

Ｓ１：私は七時に起きます。

（学生全員に言わせる。）

（４）（「いつも」イラスト見せる）

Ｔ：私はいつも七時に起きます。

Ｓ：私はいつも七時に起きます。

（「いつも」に助詞が付かないことを示す。）

Ｔ：～さん。

Ｓ２：私はいつも七時に起きます。

（５）（人物のイラスト変えて）

Ｔ：秦さんはいつも何時に起きますか？

Ｓ：秦さんはいつも何時に起きますか？

Ｔ：秦さんはいつも何時に起きますか？

Ｓ３：秦さんはいつも何時に起きますか？（何人か繰り返す）

Ｔ：Ｓ４さんはいつも何時に起きますか？

Ｓ４：私はいつも七時に起きます。（何人か繰り返す）

（動詞を「寝ます」に変えて学生動詞に質問させ合う）

（６）（「私はいつも８時に学校へ行きます。」黒板に貼る。）

Ｔ：私はいつも８時に学校へ行きます。

Ｓ：私はいつも８時に学校へ行きます。

（同様に、質問などを混ぜつつ、全ての動詞で文型を練習する。）

３．２　学んだこと

・教科書を閉じる指示を何度もしたので、後半になると学生は教科書に頼らずに耳で聞いて覚えようとするようになったので、よかったと思う。
・学習項目が多かったが、全ての項目に均等に時間を配分して行うことができた。しかし、全体的に練習量が足りなくて、学習者によく定着したとは言いがたい結果となった。
・今回は助詞以外を全て文字を使わずにイラストのみで導入したが、定着度が文字を使った場合よりよかったように思う。
・文章を全員でリピートさせると、それが長い文であればそれだけばらつきが出てしまい、うまくいかなかった。これに関しては授業後先生から、文の後半から一緒にリピートさせて徐々に長くしていくとうまくいく、というアドバイスをいただいた。
・時間の関係もあり、学生の発話がいまいちでも次へ進まざるをえない場面が多くあって残念だった。本当は、学生自身も満足のいくような発話をさせて次に進むべきであったと思う。
これが初級の最後の授業となったが、それまでの授業での反省点であった時間配分や学生の当て方などについて向上させることができたと思う。

３．今後の「日本語教育学臨地実習」の派遣先・研修対象としての適切性について

３．１　臨地実習の派遣先として

今回は視察ではなく教育実習として行ったので、大学の夏期休暇中に大学の建物をお借りして、学内外から学生を集めて２週間の集中コースを行った。よって、大学での授業を見学する機会はなかったため実際の授業の様子などはわからないのだが、先生方の日本に対する理解や、日本語教育に対する力の入れようなどを考えると、今後の臨地実習の派遣先として大変適しているのではないかと考えられる。また、先生方は今回の実習に大変協力的で、実習の内容だけではなく生活面においてもフォローしていただいた。

３．２　臨地研究の対象として

実習を行う場合、全く日本語を学んだことのない学習者を対象とすることができるので、直接法での日本語教育の難しさを体験することができる。更に今回は一人で初級４コマ、中級３コマと、多くの授業を担当することができたので、直接法での授業の進め方を身体で学ぶことができた。このような観点から、大変有意義な実習になったと考えられる。

３．３　先般的に訪問先として

多くの点においては訪問先として適していると思われるが、食事に関しては注意が必要であろうかと思われる。今回は２週間だけの滞在であったが、慣れない食事や多忙なスケジュールの中で多くの実習生が体調を崩してしまった。学内の食堂だけでは栄養が偏ってしまう恐れがあるので、疲れていても学外へ出て食事を取るなど、意識的に栄養を取る必要があると思う。学生寮内

には炊事ができる設備や冷蔵庫などがないので、余計に注意が必要である。
　また、真夏であっても長春は朝夕になると気温が下がるので、防寒対策も必要である。

３．４　本学学生の訪問先への貢献

　本学の学生が訪問先に貢献できることとしては、まず学生との交流が挙げられる。同世代の日本語母語話者と交流する機会が与えられることは、学習者にとって良い動機付けになるであろうし、また日本や日本人に対してより明確なイメージを持つことができるだろう。また、直接法で授業を行うことは、直接法を体験したことのない学習者にとって刺激になると思う。

３．５　今後の課題・提案

　今回の実習では、出発直前まで慌ただしく準備をして向かうことになってしまい、実習中にも毎晩遅くまで準備をすることとなってしまった。学生の反応を見ての教案の変更は必要であろうが、実習前に大体の授業計画を立てておいたり、教材を準備しておいたりすれば、実習中の負担が減り、体調を崩すことも少なかったのではないかということが考えられる。また、前の実習生の反省点などを確認しておくという作業も必要であったように思う。次の機会に同じような形式で実習を行う場合には、今回の実習の報告書などを参考にしてもらいたい。

「日本語教育学臨地実習」日本語教育機関訪問成果報告書

大学院総合国際学研究科博士前期課程
言語応用専攻日本語教育学専修コース
5109002
佐藤出

＜訪問先の情報＞

１．訪問に関する一般情報

訪問地（国・都市）

ニュージーランド・ウェリントン

訪問校・訪問先

Victoria University of Wellington（ウェリントン・ヴィクトリア大学）

訪問先を選んだ動機

ニュージーランドは人口当たりの日本語学習者がオーストラリアと共に高いにもかかわらず余り注目されていない。（オーストラリアの場合と比較して）日本では余り知られていないニュージーランドの日本語教育事情を探り周知させることで、ニュージーランドにおける日本語教育に発展に資することが出来ればと考えた。

訪問期間

2009 月 9 月 7 日～10 月 2 日

住居・宿泊先

大学推奨のアパートメントホテル

２．訪問機関に関する情報

訪問機関の名称

Victoria University of Wellington・School of Languages and Cultures・Japanese Programme

規模（学生数など）

大学：21380 人（内、16609 人はフルタイムの学生）：2008 年データ

立地（周辺の様子）

ウェリントン市内の閑静な住宅地に隣接した小高い丘の上に、メインとなるケルバーンキャンパスがある。そこから港やウェリントン全体が一望出来る。バスなどの公共の交通機関が発達しており、市内の移動に不便さは感じられない。

学部構成

建築・デザイン学部、人文・社会科学学部、法学部、理学部、工学部、教育学部、経営・商学部など 7 つの学部からなる。

学事暦（授業機関／休暇期間）

三学期制を採用している。一学期は 3 月 1 日から、二学期は 7 月 12 日から、三学期は 11 月 15 日から始まる（2010 年）。

研修校・研修先の特徴、その国における位置づけ

ニュージーランドには 8 つの国立大学しか存在せず、ヴィクトリア大学はその一つである。8 つの中で、オークランド大学・オタゴ大学・カンタベリー大学と並んで主要な大学と位置づけられている名門大学でもある。首都にあることもあり、法律学、行政学、観光学などを得意とする。

日本語学習者数

375 人

一クラスの学生数

10～30 人前後

主な開講科目について（科目名・学年・時間数等）

４．JAPA 112 Elementary Japanese：
月曜日（100 分）・水曜日（100 分）
バーク先生・ウラベ先生
学生数：30 人前後
チュートリアル：
金曜日（50 分×4）
ナカムラ先生
学生数：10 人前後
初級前半・150 漢字習得レベル

＊JAPA 113 Introduction to Japanese Culture and Society：予算の都合上、今年は実施せず。

５．JAPA 116　：　Japanese Language 1B：
火曜日（100 分）・木曜日（100 分）
ミツエ先生
学生数：10～20 人前後
　初級後半・500 漢字習得

６．JAPA 203；Japanese Language 2B：
火曜日（100 分）・木曜日（100 分）
カノウ先生
学生数：30 人前後
　中級レベル・750 漢字習得

７．JAPA 405　：　Special Topic：
金曜日（100 分）
　バーク先生
学生数：2 人
　上級レベル・日本語能力検定 1 級以上

日本語担当教員数
専任　（日本人：3 名，日本人以外：国籍 ニュージーランド　1 名）
非常勤（日本人：4 名，日本人以外：0 名）

使用教材
初級前半：「げんきⅠ」　後半：「げんきⅡ」
中級：「AN INTEGRATED APPROACH TO INTERMEDIATE JAPANESE [Revised Edition]
中級の日本語」

クラスの様子
比較的少人数ということもあり、まとまりが良くリラックスした感じのクラスが多い。

臨地実習に行くのが望ましい時期
特にないが、強いて言えば学習者がある程度日本語に習熟した 9 月から 10 月頃が望ましい。

３．宿泊先について
住居の形態
アパートメントホテル

一人部屋でそれぞれキッチン、シャワー、トイレ付き。無料で使用できるインターネット回線がある。

学校までの行き方

アパートメントホテルから徒歩で 20 分程だが、小高い丘を登ることになるため、キャンパスに着くまでに結構な運動量を消費することになる。

周辺の環境

学内に食堂やスーパーがあるので、便利である。また大学の周りにはいろいろなレストランもある。徒歩で、簡単に市内へも出られるため便利である。

〈その他研究、実習の成果〉

１．施設見学に関して

１．１　内容

非常勤講師の方と共有で研究室を使わせていただいた。小高い丘での立地もあり、狭い構内は複雑で、慣れるのに時間がかかる。IT 設備は充実している。教室にはコンピューターが一台ずつ備え付けられており、パワーポイントなどを用いた授業を行うことが可能である。

１．２　学んだこと

スペイン語に次いで、日本語は人気がある。ただ、大学がリサーチ重視の姿勢を打ち出しており、一般的に外国語教育は予算の面で苦戦を強いられている現状がある。

２．授業見学に関して

２．１　内容

JAPA 112 Elementary Japanese：月曜日・水曜日・金曜日　バーク先生・ウラベ先生・ナカムラ先生

初級前半・150 漢字習得

＊JAPA 113 Introduction to Japanese Culture and Society は予算の都合上、今年は実施せず。その分、Elementary Japanese におけるチュートリアルにおけるパターンプラクティス・会話練習などを重視

クラス編成は、現地ニュージーランド人（白人）が７割・アジア系２割・イスラム系１割であり、レベルが上がるにつれてアジア系の割合が増えてくる傾向が見られる。

月曜日のバーク先生の授業は講義形式で　「げんき１」の文法・文型と漢字が中心である。パワーポイントを用いながらてきぱきと手際良く説明していく。特筆すべきは漢字で、象形文字の性質を絵・イラストで表現して漢字の由来から説明して、記憶になるべくとどまる様に工夫され

ていた。

水曜日は、本来はバーク先生の担当だったが、日本語学科、引いてはヴィクトリア大学のリサーチ重視の姿勢を受けてバーク先生の代わりとしてウラベ先生が担当している。パターンプラクティス・ペアワークによる会話練習などの実践形式であり、月曜日の講義を補完・補強する役割を担っている。

金曜日はチュートリアル形式で、教室もパソコンのあるランゲージラーニングセンターで行われる。内容は月曜日での学習内容の定着の確認が中心であり、LL 形式による発音練習・漢字の宿題の答え合わせのあとに、ペアで競い合うゲームが行われた。

JAPA 116 ： Japanese Language 1B：火曜日　ミツエ先生

初級後半・500 漢字習得

使用テキストは、「げんき２」。聴解・読解が重視されている。ライティングはやはり漢字の習得が中心となっている。通常の授業のあり方としては、最初に簡単な質問を提示して、会話スキットを聴いて答えを確認して、発声練習・全員で復唱したあと、ペアで練習してもらったりする形態をとっている。また、漢字の読みや意味をパソコンを使ってどう探るかについてのデモンストレーションや、電子辞書の購入の勧め・ニンテンドーの DS を使った漢字学習などを説明していたのが印象的であった。学生は熱心で、ある授業では「マリと子犬の物語」という映画の DVD をクラスに持ち込んで、最初の１０分程度を皆で鑑賞した。感心したのは、この DVD は視聴覚障害者対応になっているため、日本語字幕・音声による場面解説がついており、日本語学習者にとって大変勉強になる。このような使い方があることに新鮮さを感じた。因みに私はこの映画を知らなかったのだが、何でも 2004 年山古志村での地震を背景に、人間と犬の交流・犬の親子愛を描いた感動作らしい。この DVD を持ち込んだ学生によると、彼の母親は日本語が全然駄目だが、この映画を見て大泣きしたらしい。典型的なニュージーランド人のような彼が、私も知らないような日本映画を、家族とごく自然に一緒に見ているのだと思うとくすぐったいような不思議な感じがした。

JAPA 203；Japanese Language 2B：木曜日　カノウ先生

中級レベル・750 漢字習得：（ヨーロッパ系白人６割・アジア系４割程度）２８人

使用テキストは、「AN INTEGRATED APPROACH TO INTERMEDIATE JAPANESE [Revised Edition] 中級の日本語」である。

「げんき１・２」を修了した大学２年生、または日本語学習歴３年以上の者が対象である。

JAPA 405 ： Special Topic：金曜日　バーク先生

上級レベル・日本語能力検定１級以上

Honour student　とも呼ばれる４年生が対象。学生は中国系・韓国系の２人。教室はバーク先生の研究室が使われる。

内容は、「月刊言語」などから抜粋した記事・論文を輪読する。日本で言うゼミの形式に近い。バーク先生の関心領域を反映して、コンテキスト（文脈）を重視した語用論・ポライトネス・認知言語学などの視点からの論文・記事が選択されている。バーク先生による場面による細かい日本語の使い分け・ニュアンスなどの日本語の解説は見事で、同席している日本人の自分も大変参考になった。

２．２　学んだこと

初級からレベル２（中級）への橋渡しが大変で、特に読解は教室外での独習にかかっており、そのための動機づけが重要となる。コミュニケーション重視の姿勢とも相俟って、確かに数カ月の日本語学習で結構日本語をうまく話すものがいるのに反比例して、読解の方は遅れがちである。漢字の影響が大きいのであろう。確かに漢字仮名交じり文は、漢字に慣れ親しんでいる漢字圏以外の学習者にとって負担であろう。レベルが上がるにつれて、より高度な読み書き能力が要求されるため、白人・イスラム系などの非漢字圏の学習者のドロップアウトが目立つようになってくる。

３．教壇実習に関して

３．１　内容（教案、教材等を載せてください。複数コマを担当した場合は、一コマ分）

JAPA 116 ： Japanese Language 1B 初級後半の授業１コマを担当。以下はその授業内容である。

9 月 22 日（火）15：10～17：00

【授業の内容】
「げんき２」第 22 課：日本の教育　についてパワーポイントを使いながら復習・文型を使った応用練習
【準備】
パワーポイント
第 22 課の会話文が収録された CD

【授業手順】
自己紹介の後、
　パワーポイントを使いながら、
８．「～せる・させる」
９．「～てあげる・くれる・もらう」の簡単な説明復習
１０．「げんき２」218 ページの「話しましょう」を題材に、ペアによる上記の文型を使った簡単な会話練習
１１．「～なさい」
１２．「～ば」

１３．「～のに」
１４．「～のような・ように」の簡単な説明復習
１５．CD で第 22 課の会話文を全員で一度聴く
１６．一文毎にモデル会話を全員でリピートする
１７．ペアでモデル会話の練習
１８．パワーポイントを使って会話文についての質問をスクリーンに提示して、学生に答えてもらう

３．２　学んだこと

初級後半レベルであるということ・少人数であることなどを考慮して、教師と学習者の距離が余り感じられない打ち解けた授業にしたいと考えた。また、ミツエ先生との事前の打ち合わせによると、真面目な学生が多くてまとまりの良いクラスではあるが、反面、自発的な発言が少ない傾向が見られるとの事であった。それらを踏まえて、学習者の自律性（autonomy）を引き出すようにしながら、そして同時にプレッシャーを感じさせないようなラポールのある授業になるように注意した。

実際の授業では、まず、学習者１人１人に簡単な自己紹介をしてもらった。その時に（事前の打ち合わせでの学習者情報を基に）此方から名前を呼び掛けるようにした。例えば、「もしかしたら、＊＊＊さん？」のように。ただ学習者に名前を言ってもらうという受け身の姿勢ではなく、此方から率先して学習者の名前を推測して呼び掛けることによって、積極的に働きかけ・親しみを感じてもらい、引いてはクラス全体のラポールの早期の確立を狙ったものである（ちなみに「名前当て」は全て正解であった）。

活発な発言の少ないクラスとのことだったのだが、数人の学習者が自発的に発言してくれたこともあり、教師・学習者双方の、または学習者間におけるやり取りが頻繁に見られるクラスとなったことはよかった点であり、その意味では思い通りに授業が展開出来たと思う。

悪かった点としては、時間配分が挙げられる。一応、教案を基に授業を進めようとしたが思い通りに行かなかった。他の先生方は、進行具合に応じて上手に時間を調整していたが、私の場合はそうは行かず、５分ほど予定より早く終わってしまった。時間余り対策を事前に立てるなどして対処しておくべきだったと悔やまれる。

全体的には、自分の力量で授業を行ったというより、学習者に助けられながら何とか授業を乗り切ることが出来たというのが率直な感想である。

４．今後の「日本語教育学臨地実習」の派遣先・研修対象としての適切性について

４．１　臨地実習の派遣先として

今回は教育実習よりもニュージーランドの高等日本語教育事情の視察が主眼であった。この実習は、担当の先生が個人的な事情により授業が出来なくなり、急遽報告者が代理として講義を行

ったものである。よって、大学の諸般の事情を考慮すると実習先としては確保することは、余り容易ではないものと推察される。

３．２　臨地研究の対象として

ニュージーランドの高等日本語教育事情が、良い面も悪い面も含めて肌を通じて実感することが出来た。

良い面：日本語教育が熱心に取り組まれている。

悪い面：大学の研究重視の煽りを受けて、人気の割に予算面などで冷遇されている。

４．３　先般的に訪問先として

気候は温暖で生活する面においては、日本と同様のレベルが期待され、ほとんど問題はない。日本と比較して生活のペースはスローペースであり、よりリラックスした快適な生活が期待される。

夏でも朝夕になると気温が下がるので、防寒対策も必要である。風が強いのでその点を考慮すること。

４．４　本学学生の訪問先への貢献

本学の学生が訪問先に貢献できることとしては、まず学生との交流が挙げられる。隣接するオーストラリアと違い、ニュージーランドの大学との交流は現在の状況では限定されている。この視察によって、(本学を含んだ) 日本の高等教育機関とニュージーランドの大学の交流の将来の架け橋のきっかけとなればと考えている。

４．　５　今後の課題・提案

今回の視察では、出発直前まで慌ただしく準備をして向かうことになってしまい、初めてということもあり、また現地での連絡などが上手くいかないこともあって状況になれるまでに日時を要した。急遽授業を代講した時は、ほとんど準備が出来ず満足な授業が出来なかったことから、ニュージーランド到着前に、事前に実習のスケージュールなどを先方と細かな点まで詰めておくことの重要性を強く感じたことである。近い将来、ニュージーランドで視察・実習を行う場合には、今回の報告書を参考にして頂ければ幸いである。

「日本語教育学臨地実習」日本語教育機関訪問成果報告書

大学院総合国際学研究科博士前期課程
言語応用専攻日本語教育学専修コース
5109014
松井和夫

＜訪問先の情報＞

１．訪問に関する一般情報

訪問校・訪問先

東京都府中市立白糸台小学校

訪問先を選んだ動機

日本語指導が必要な外国籍席児童が 6 名在籍しているが、東京都の「過配」が措置されずに指導に苦慮している典型校だから、教育支援校・参与観察校に選定した。

訪問期間／頻度

2009 年 5 月 13　日～2010 年 3 月１７日

毎週水曜日　午前中

２．訪問機関に関する情報

訪問機関の名称

東京都府中市立白糸台小学校

規模（学生数など）

18 学級（児童数 566 名）

立地（周辺の様子）

住宅地（TUFS の留学生の子弟も在籍）

学事暦（授業期間／休暇期間）

4 月から翌年 3 月　（夏季休業：7 月から 8 月、冬季休業：12 月から 1 月、春季休業：３月から 4 月）

一クラスの学生数

平均 31 名

教員数

専任　（日本人：２５名，日本人以外：　0 名）

非常勤（日本人：4 名，日本人以外：国籍　0 名）

使用教材

文部省検定教科書（国語、算数、生活科、理科、社会、音楽、図工、体育、道徳）

クラスの様子

参与観察、教育支援学級：1年3組36名（男子１８名、女子18名）内外国籍児１名（男子）

比較的落ち着いた、開放的で明るい児童が多く、学力面でも平均以上と判断できる。

３．その他、補足事項　：特に」なし

〈その他研究、実習の成果〉

１．施設見学に関して

１．１　内容

各教室、少人数指導教室、図書室、体育館、「放課後子ども教室」など

２　学んだこと

当初の管理職や担任等との懇談を通して、当該校の教育目標・教育課程・教育計画、特色ある教育活動、教科教育や生活指導上の課題、地域や保護者との関係と課題、TUFS との連携、日本語指導が必要な児童の状況と課題等について情報を得、損語も不断に情報交換を行いながら教育支援と参与観察を行ってきた。

2 年間の「縦断的研究」と教育支援ということで理解と協力を得て進めてきたので、次年度も継続の予定である。

２．授業見学に関して

２．１　内容

毎週水曜日に学校訪問をして、当該学級の国語と算数の授業の参与観察を行ってきた。

２．２　学んだこと

担任のA先生の教育観、授業観、児童観、授業スクリプト等を理解することができた。外国籍児童の受け入れ・適応・社会化の促進、日本語指導や教科指導の方針、課題意識などについても、A先生が創意工夫し、真剣に取り組み、悩んでいることを知った。

私の経験（学校現場での管理職経験や教育行政のスーパーバイザー経験等）、大学院での研究を基に、最大限の協力・支援をしながら、参与観察も進めたいと考えている。

１９．視察結果の報告

担任の学級経営、教科指導・生活指導面での努力により、外国籍児童の学級集団適応もBICSやCALPの習得も、比較的順調に進んでいる。

他の児童の外国籍児童の見方、関わり方も、入学当初は課題があったようだが、その後改善され、今は良い関係になってきており、外国籍児童も「ストレンジャー」、「マージナルマン」的存在から「インナー」になってきている。それに伴って、外国籍児童の日本語能力も高まってきている。

４．今後の「日本語教育学臨地実習」の派遣先・研修対象としての適切性

４．１　臨地実習の派遣先として

各院生の将来設計とTUFSの計画・意図、受け入れ先の願い・実態によるので、一概に言えないが、情報の共有化、選考や派遣の経過・結果の透明化、納得性の確保が急務だと考える。

４．２　臨地研究の対象として

４．１に書いたように、院生・TUFS・受け入れ先等の事情によるが、できる限り多様で、開かれた情報の提供と選考・派遣の透明化を図りながら、拡充していただきたい。

学校現場をヒフィールドに考えている方には、可能な限りお手伝いさせていただきたい。

４．３　全般的に訪問先として

「日本語教育の臨地実習」と言っても、正直な物言いをさせていただくなら、日本の「教育実習制度」の海外版・他の機関版なのであるから、受け入れ先の事前・事中・事後の事情・課題・「迷惑」についても思いをいたすべきだと考える。本人はもとより、在籍校の多方面にわたる真摯な姿勢と責任ある態度を確保した上で、失習性は自分の学んだこと・研究してきた事を生かし、相手校・国への還元をしつつ、学びの深化・拡充を図りたい。

４．４　本学学生の訪問先への貢献

日本語教育を研究し、将来何らかの形で日本語教育に従事したいと望んでいるネイティブの日本人学生・院生と触れるということは、相手国・学生も望んでおられる事だし、意義あることでもあると考える。

しかし、上記のようにある時期だけそこで「指導」するということは、実はとても責任重大なことである。仮に「良い指導」ができたとしても、当該機関のその後の指導を考えると、(課題のある指導なら「指導のし直し」が必要なのだから一層そうだが)、誠実で真摯で、謙虚な姿勢を大切にしなければならないと考える。

４．５　今後の課題・提案

臨地研究の年間計画、受講生の計画・願いの把握、派遣期間・派遣国・派遣者の情報の共有化、経過・決定の透明化について改善をお願いしたい。